

A scenic view of a mountain valley. The foreground is filled with dense green foliage. In the middle ground, a valley opens up, showing a small village with several buildings and utility poles. The background consists of rolling green mountains under a clear sky. The overall atmosphere is peaceful and natural.

縮小社会と農業

佐藤洋一郎

農業生産の縮小がもたらすもの

人間活動の低下 ⇒ 里山(人為生態系)の衰退

生産と供給に関するネットワークの崩壊

生産と供給に関する知の喪失

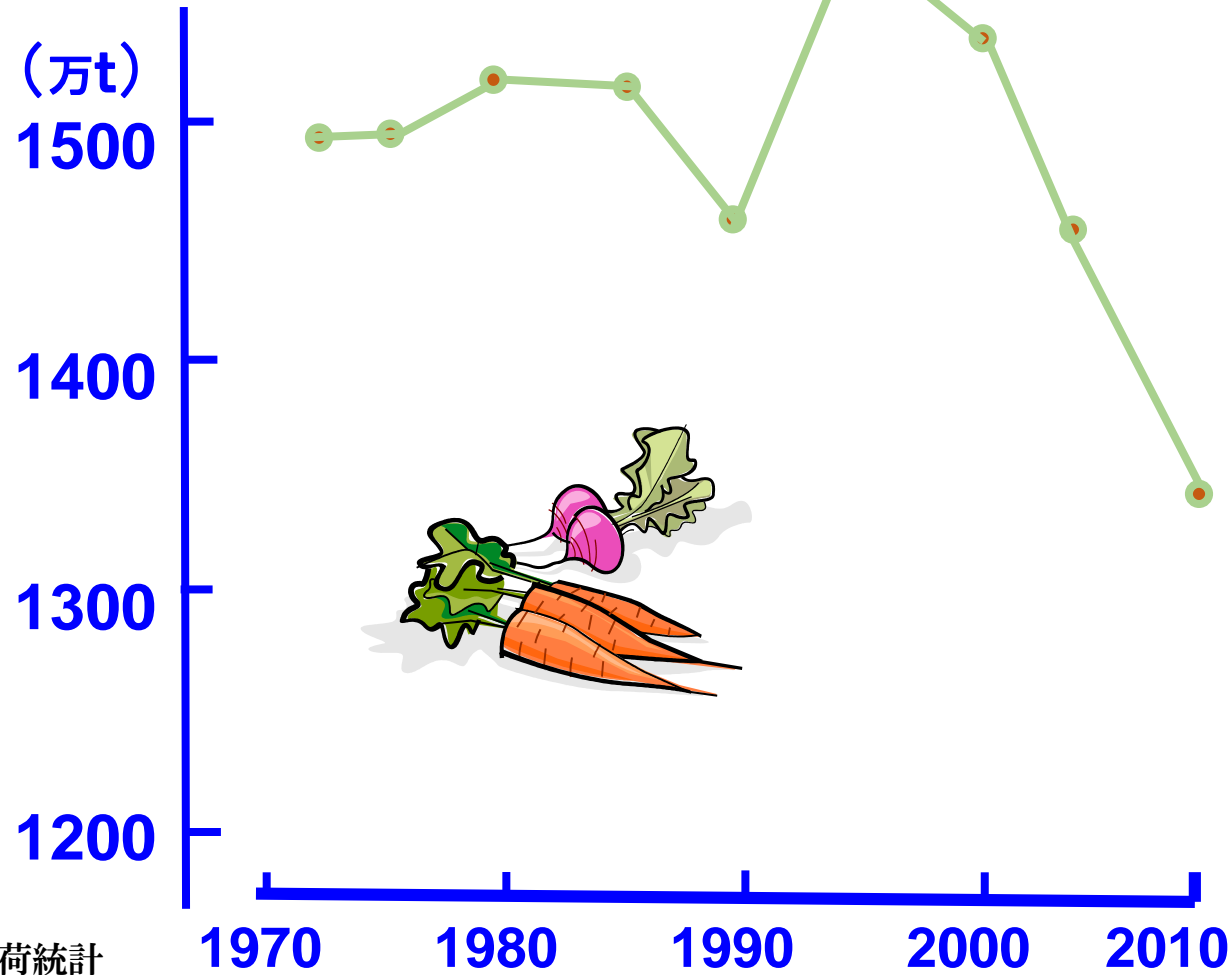
生産と供給の文化の衰退

なんでもできる個人が求められる ⇒ Generalistが希求される
(つまり「百姓」)

ちいさな循環が求められる

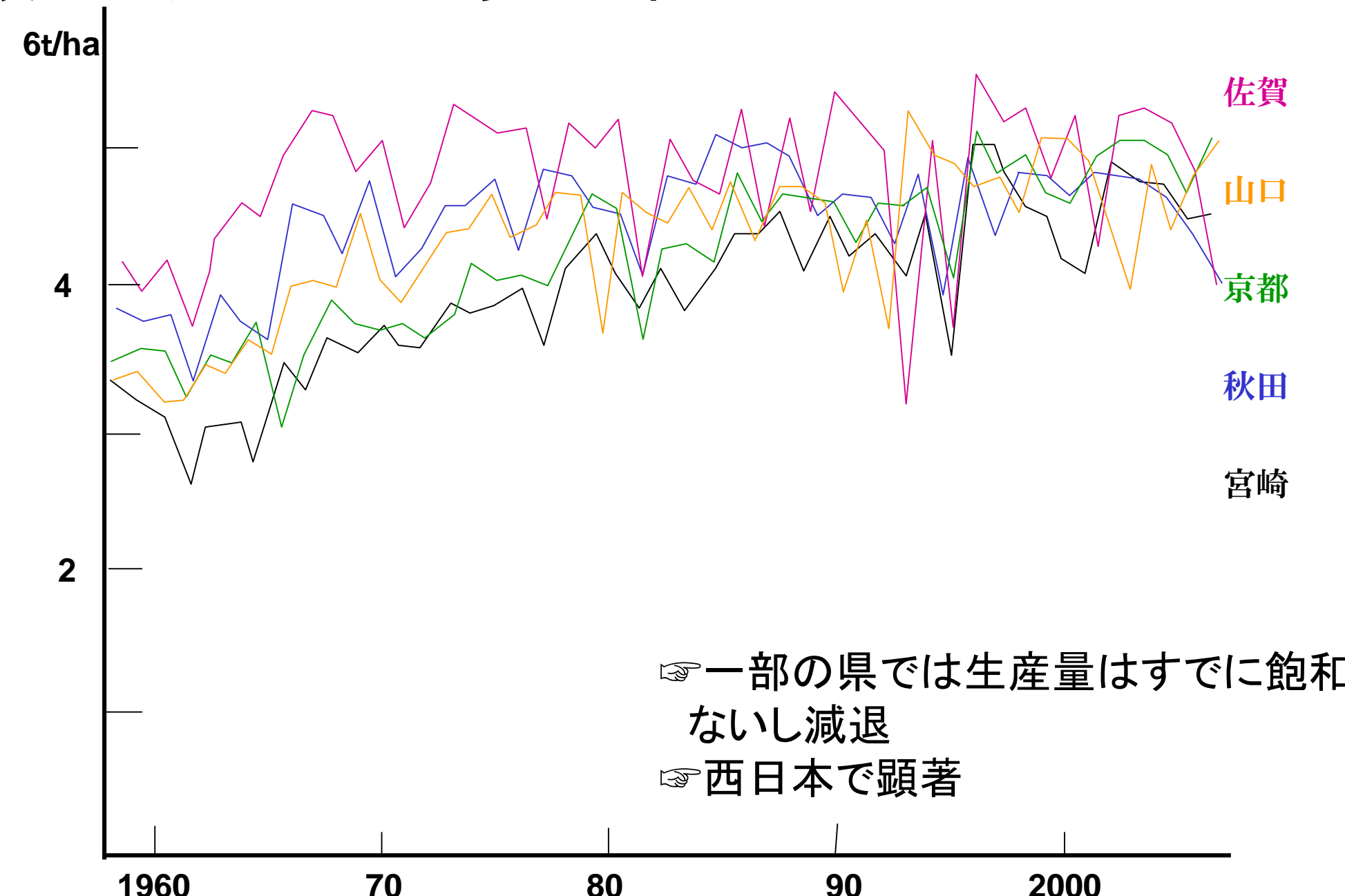
中長期的には都市の衰退(縄文時代以来の普遍的傾向)

減退する生産(野菜)

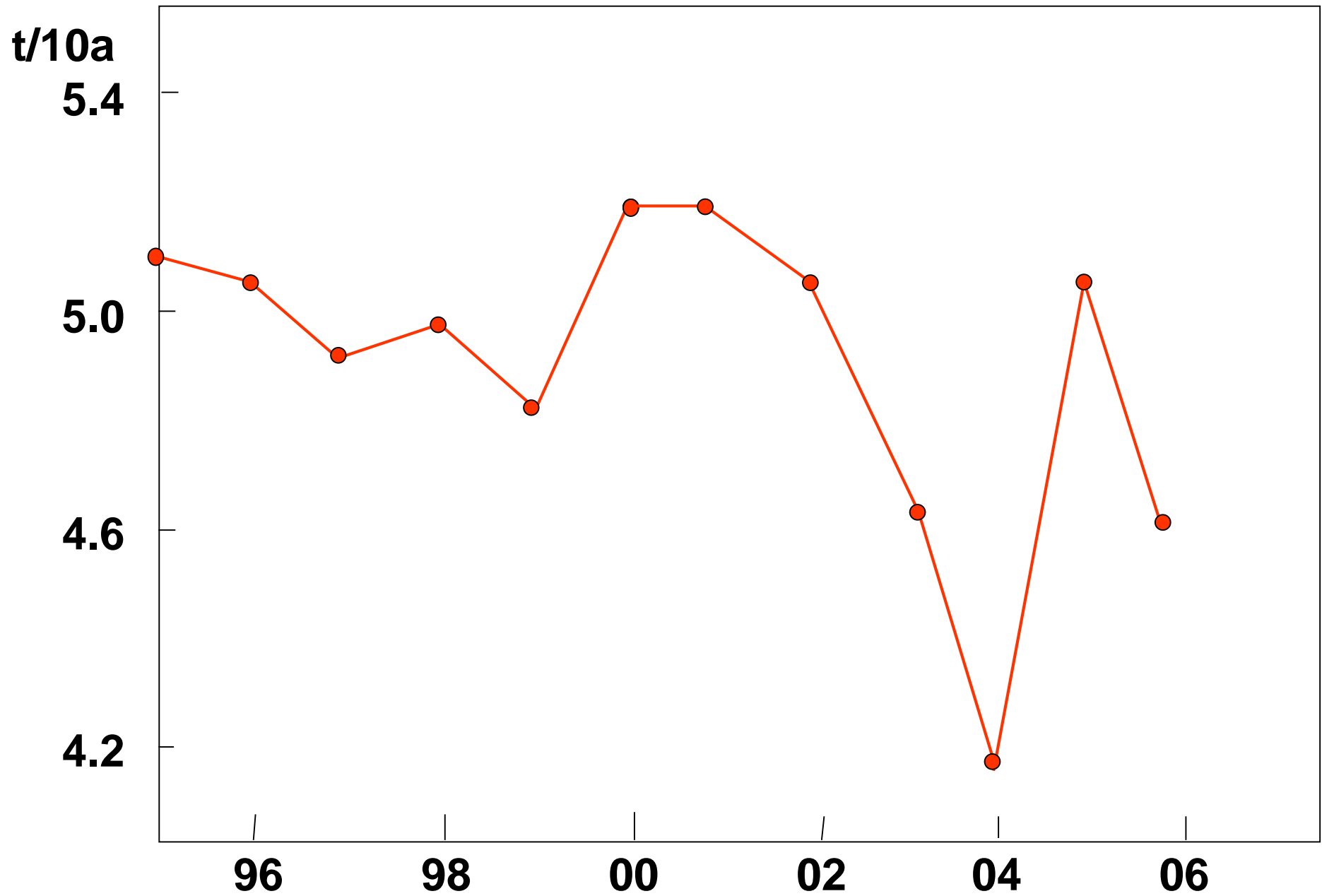


資料：
野菜生産出荷統計

単位面積当たりイネ収量の変化(県別)

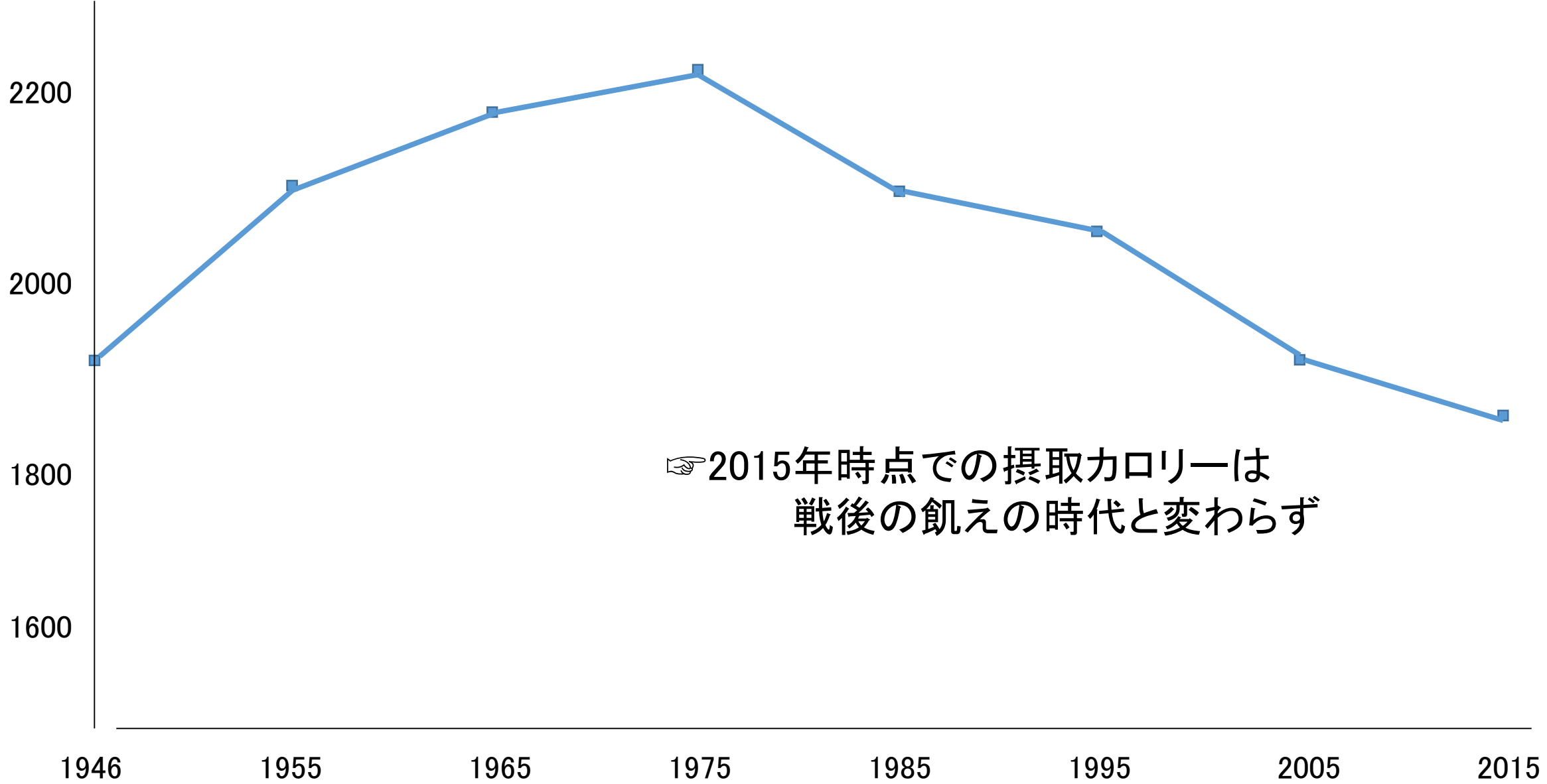


山口県の事例 (t/ha)



消費も減退(1人あたり摂取カロリー)

Kcal/capita



👉 2015年時点での摂取カロリーは戦後の飢えの時代と変わらず

消費はなぜ減退したか？

❖ 運動量の低下

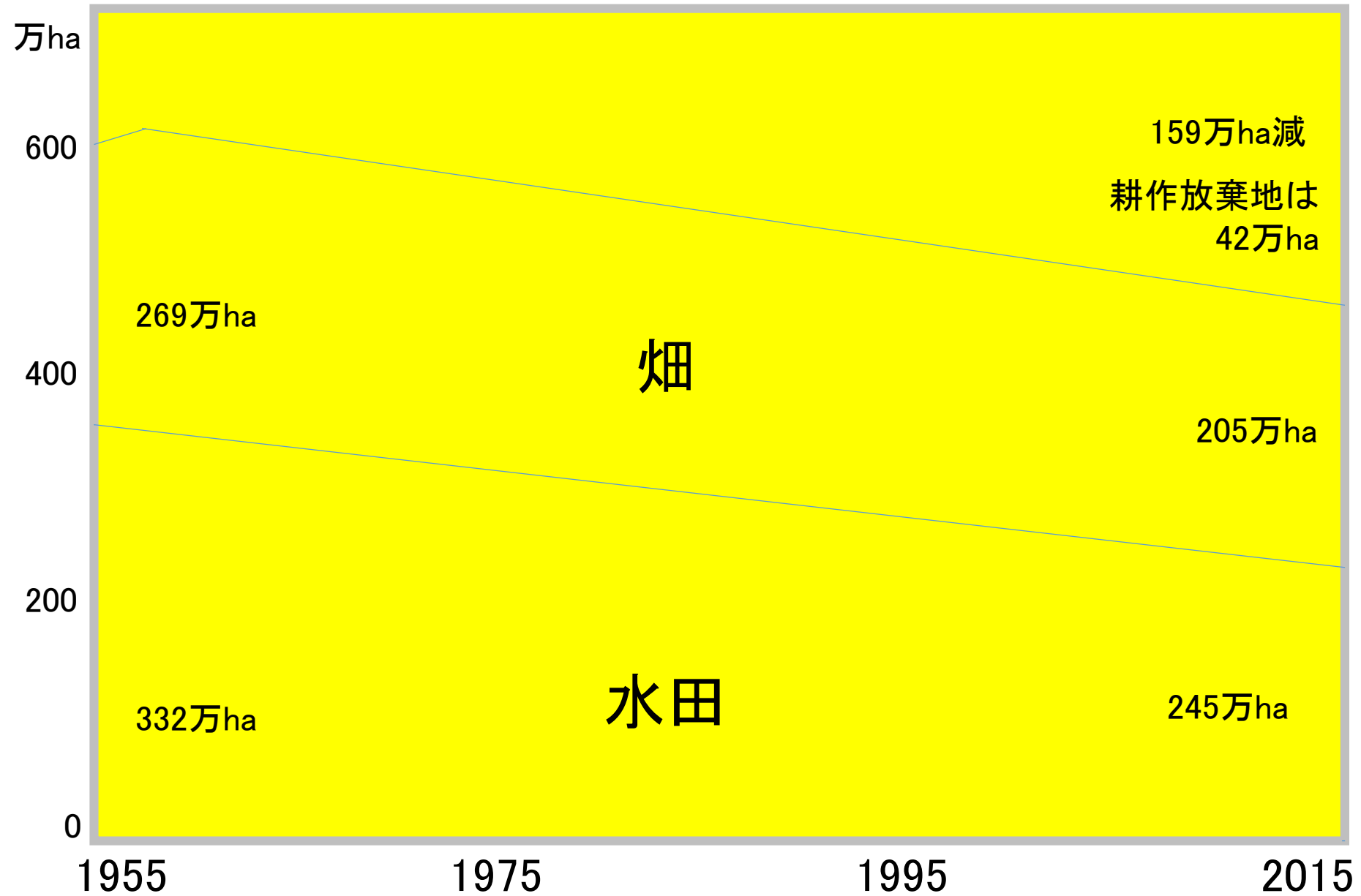
- ☞ 高齢化
- ☞ 交通の発達
- ☞ 社会構造の変化(食の軽視)

❖ 「痩身」「ダイエット」などの宣伝

- ☞ 業界の戦略
- ☞ 医療関係者の「責任」(平均値主義)
- ☞ 社会全体に蔓延する「反教養主義」

❖ いつでも食べられるという安心感

耕地面積の変化… 人間活動の低下



耕作放棄地の拡大

☞ 遷移の進行

☞ 害獣の「ぬた場」に



耕作放棄地の増加がもたすもの

耕作地システムの崩壊

灌漑水路の劣化、害虫・病原菌等の増加

限界集落化

社会システムの崩壊 → 人口減少 → 耕作放棄地増加へ
(悪循環に)

景観の劣化

獣害対策を講ずる農地



野生動物の跋扈(1)

日本における有害の野生動物

サル、イノシシ、シカ、エゾシカ、クマ、カラス、モグラ…

《人間=都市住民, 野生動物=田舎住民》ではない！

野生動物による農業被害(2012)

鳥類	28.4千トン、	419,300万円
獣類	672.8	1,877,100

もっと大きな問題=こころの問題

「イノシシに荒らされた畑をみると、次に何かを作ろうという意欲が湧いてこない」

「サルは、商品になりそうなシイタケばかりを食い散らかし、楢木にはそうでないものばかりが残っていた」

野生動物の跋扈(2)

サルによる人的被害(負傷者数=NHK調べ)

静岡県東部・・・	118人(2010)
鹿児島県南さつま市・・・	63人(2010-2013)
長野県上田市・・・	27人(2014)など

クマによる人的被害(WWF調べ)

死者4名、負傷者101名(2017)

ハチ(おもにスズメバチ)による死亡者数

1984年に73人、以後毎年13～46人が死亡

獣害とは何か？

獣害 ≠ 現代の問題

➡ 猪垣(ししがき)の存在

江戸時代以後、東北以南にあらわれたイノシシやシカの害を
防除する土塁など

➡ オオカミの害

獣害 = 人と野生動物の関係性

➡ 狩猟採集時代(社会)における「獲る・獲られる」の関係

遊牧が農耕から分かれた理由

➡ 森の劣化だけが原因ではない

➡ 「雑草・害虫(獣)・病原菌」

文明という装置に内在する必然(人が作った存在)

獣害の増加は人間活動の変化による

獣害の主観性

ヌートリアの例

☞ 戦前、軍用に導入・飼育 → 戦後、放棄 → 野生化

☞ 農業被害に（食害、堤防の脆弱化など）
平成20年度には1.2億円

雑草の例

☞ コムギ畑の中のオオムギ

根本的防除はきわめて困難

エネルギー多用型の農業

- 👉今はやりの「スマート農業」
省力化が背中を押した
- 👉しかし野菜工場では化石燃料由来のエネルギー（電力・肥料製造など）が大量に使われる
先行きは不透明



地方で起きていること(漁業)

港で上がる鮮魚は仲買の手で東京、大阪へ。地元の魚はうまくない

地方創生に使って人を呼び込めないか？



人手がなく困難

W県N町で。2017年12月



S県I港の魚市場

「大量に上がる魚種で契約のあるものは売れるが、それ以外は近在のレストラン等が購入。しかし今の世代がいなくなると誰も使わなくなり『雑魚』扱いになるだろう」



漁港の衰退へ
魚種の多様性の喪失へ
いわゆる食のグローバル化へ

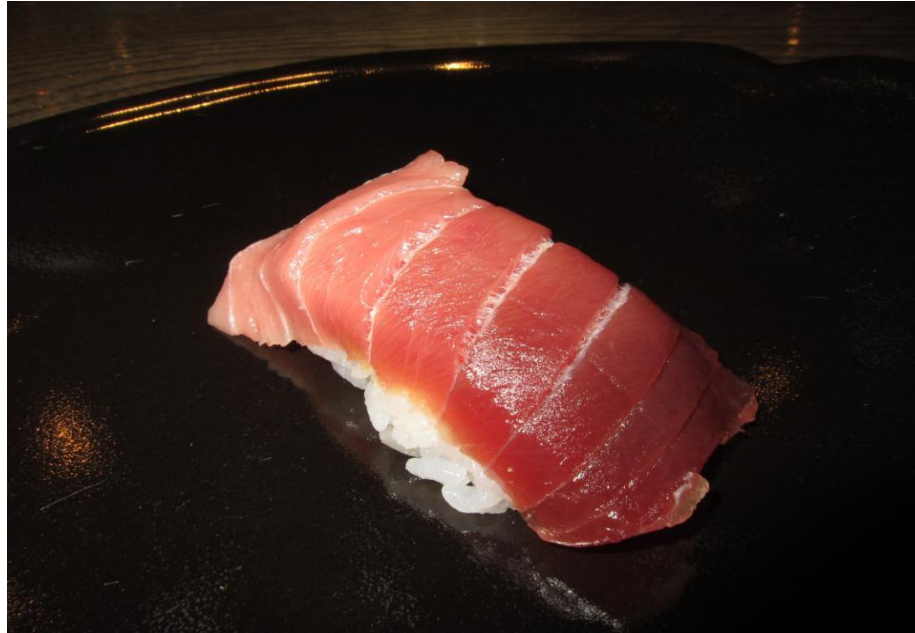


グローバル化する食



フードマイレージ

食べることにどれだけのエネルギーを使うか



静岡市清水のすし店

米（シャリ）	20g	40km
鮭	20	700
フードマイル	14.8kg.km	



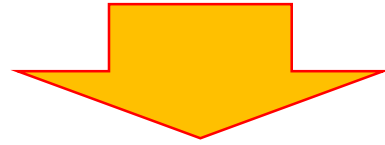
Berkeley市のすし店

米（シャリ）	20g	110km
鮭	20	9000
フードマイル	182.2kg.km	

12.3倍のフードマイル

食のグローバル化と縮小社会

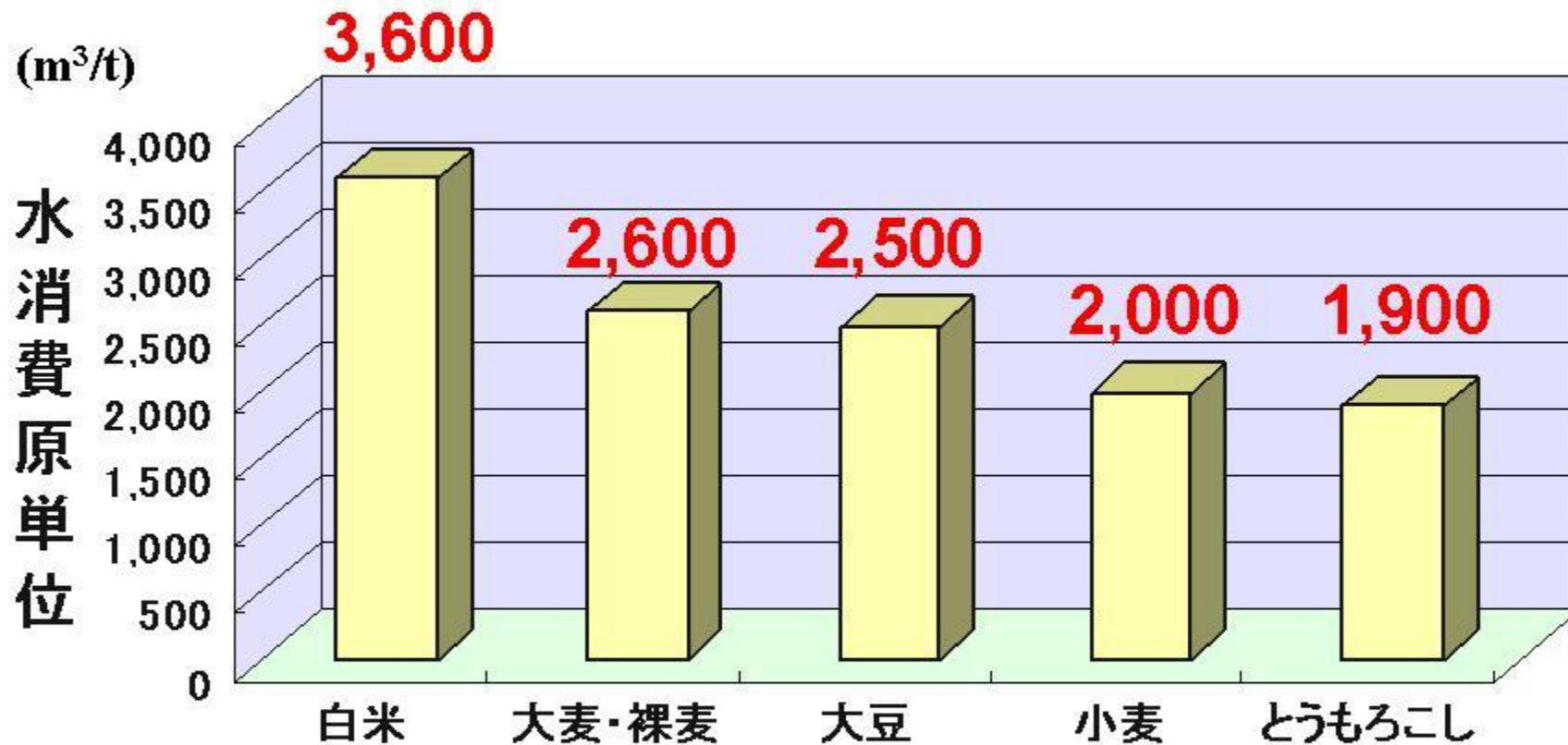
縮小社会は農業生産を縮小し、農業生産の縮小は食のグローバル化を促進する



「地方の食文化」を衰退させ、食の生産を一層減退させる

農業を「エネルギー消費型」にし、地球環境への負荷を増大させる

水消費原単位の算定 —農作物—



主要穀物・豆類(可食部)の水消費原単位

水消費原単位の算定 —畜産物—



主要畜産物の水消費原単位



まとめに代えて

「なんでもできる」人材の育成＝「百姓」になろう

都市住民も食料生産に参加を

排せつ物を捨てないで

「最後の貢献」を！